

特42

459

拾
壺

61

東 京 圖 書 館

二
〇
冊

七
號

四
架

函

音
曲
類

和
書
門



松垣

是之肥後芸園名匠と申す
君住の僧より此の
観世音の意は

龍の致景とみる
南西の海雲漫として萬古に
守あり人またて慰む

松垣

敷景あしへ銀車さばりまへよ
住しき靈地と思ひて三年の向の居
位しつゝまへく^下家よ又百もも及
流しむほしき若女毎日あつ乃水
をぬく舞つるも白もあつてら
いなる者くく^深尋りやと思ひ
かき白行の状く^深目も孩

屋ぬく^下又龍身八雲とて
舞鷹の如く思ひ入向も又是同じ
貧家よ親をく^下財^上よ
故人^下若得養へか^下もあ
露命ま^下ま^下霜^下葉^下似^下た^下る^下
あ^下る^下水^下の^下具^下く^下り^下け
ぬ^下く^下ま^下る^下愛^下れ^下も^下白^下行^下の^下く^下

きんかあし讀しと聲のこころなる昔

筑前の人草書よ為よ松垣志らう

ひく信し白拍子なよの裏しく此白

けの息よ信也用かたらさるるを

中ある具あつたは度りあつたり

と藤原の興紀編りし時女秋もあ

おこりきたまひり給よ具秋返て

しあするそと甲の論を母を

轉し也女うもまじとをせとく

唯白けり秋はあまの考そかめる

空もあまのへん舞もかたもありの具

志もあまのへん給り彼白川の身を

甲あて我師あつたは給り下り文

まらねて甲あまのきりく甲あま

きんかあし讀しと聲のなりなる昔

筑前の大宰府よるよ松垣志らう

ひく信し白拍子なよ大妻しく此白

けの息やよ信也甲うまはらふやと

中あふ思きくはるるのあふり

と藤原の思はるるの一時女秋もあ

おこりきたまひり給よ其秋はて

しあするそと甲論をあら

積し也女うもまじをむとく

唯白け乃秋はあふ考そかめる

空をふまのふら舞もがとある具

法もしるるを給り彼白川のほと

甲あて我師やとひるるのあふ

まらたてがせよきりく甲あふ

古の松垣の女候よりわが我の詞を
 かうきさうもさうの事候亭持
上男 思ふさうも事候ま
 至さく目も言ふかく霧
 少くさくもさうの事候れ灯の
 候乃くもさうの事候まはやく
下女 ありさうの事候も有難の事候

や那 上 風緑野はたさまつてさく
 了あそく雲うんもさうの事候まはやく
 月桂まも 上 朝は紅顔あつてさく
 路またの 比 さく 比 タの白骨
 とあつて 女 郊原よりさく 女 かの為入
 有候 地 せき 女 常 女 死
 乃さうの事候論さうの事候

あゝいふも若少とらた命あ
 替るニともく期とさうた事ら
 臧とニ若きらして期分
 けニすニまニあニさニさニらニらニ
 人あがあへくあさうらうら
 へしは跡とてまニさニしニらニ
 茶と歌りてだ僧ははあ教く丸

なる人あさうらうら
 中よ人顯りる有まあ
 茶と歌りてだ僧ははあ教く丸
 もせうらあをみあわらうら
 けのさうらあをみあわらうら
 甚痛うあはる様あ今も執
 けあさうらあをみあわらうら

上
たやく浮ひ給世 我古の舞女のほ

まねきも胸也。其罪ゆつと故より

とも苦きと三衛のよ。熱鉄の桶を

あひ猶火のつらきとばきして此水と仮

中
其水湯とありて我をばくつら

際もあまれば此程に僧の値遇

よらちつらむのあまきた猶火のあ

同上

はつら因果の火とくをた其執心と

女
あり捨ててさくつらひ給よへし

そくはつらむに僧のため此がまき水

甲
とぬはなむ羅也あはくあへまき

思ひもあつらむと又た人の枝の露の玉

甲
きりま世 ぬき白くつら月もあよ

引こもあまきとあひ給よへし

裏かき泣してみくらよかろくも髪
大吹しもくろく塵芥がうりきる身乃
あつらう悲まのさるもよと思ひ
ゆれあつちも具白に浪かき
毎女 教原の興花は具のうへ乃白拍子
と一うと有しうの昔の花は神今交
きしもあつちをくろく油とをくぬ

今つらま陸奥のきり細多胸あ
ち花付と白拍子具花もろまの有ま
よしく支とても昔手刻し舞の事六
まうてめ今うのあま^上と^上奥花
志きうよ宣へは清ま^{女上}あつち油
露うも松し舞出の^{女上}松垣の女乃
ツ若果と^上水むもつら乃縄の

明治十七年三月六日翻刻御届
同年四月十二日別製本御届

翻刻人

京都府平民

寺田熊

下京區第五組麩屋町

錦小路五梅屋町十三番戶



